

浄泉寺通信

第16号
 年4回発行
 浄土真宗本願寺派
 吉見布教所浄泉寺
 埼玉県比企郡吉見町
 長谷1678-6
 発行責任者 福井学誠



二階堂和美さん

新年度が始まりました。受賞こそ逸したものの、先ごろ米アカデミー賞候補になったスタジオリのアニメ映画「かくや姫の物語」で、主題歌「いのちの記憶」を歌う二階堂和美さん。主題歌を製作する前、高畑勲監督から「この映画はハッピーエンディングではない。見終わった観客はやりきれない気持ちになるだろう。それを慰める歌が欲しい」と注文がつけられたそうです。映画のラストで、かくや姫は月へ帰って行きます。それは人の臨終に似ています。だから、「姫がこの地に来てよかったという気持ちを含んで欲しい」とも。いのちが終わるその時に、送る側であっても、送られる側であっても、自分に何ができるかをじっくり考え、二階堂さんは「必ずまた会える 懐かしい場所で」という歌詞をつむぎました。

ちようどその頃、自分のおなかに赤ちゃんがいたことも、少なからず影響したでしょう。その歌を歌う歌声は、温かいものに包まれていくような、聴くものを癒してくれる不思議な歌声です。

あなたに触れたよろこびが深く深く
 このからだの端々にしみ込んでゆく
 ずっと遠く
 なにもわからなくなっても
 たとえこのいのちが終わる時が来ても
 いまのすべては
 過去のすべて

必ず また会える
 懐かしい場所

あなたがくれたぬくもりが深く深く
 今 遙かな時を越え
 充ち渡ってゆく

じっと、心に
 灯す情熱の炎も
 そっと 傷をさする
 悲しみの淵にも

いまのすべては
 未来の希望
 必ず 憶える
 懐かしい場所

いまのすべては
 過去のすべて
 必ず また会える
 懐かしい場所

いまのすべては
 未来の希望
 必ず 憶える
 いのちの記憶

「かくや姫の物語」主題歌
 「いのちの記憶」より

二階堂さんは広島県大竹市にある、浄土真宗本願寺派のお寺に生まれ育ちました。東京での音楽活動を経て、実家のお寺を継ぐために帰郷。音楽活動が波に乗りかけていたのにと、納得いかぬまま帰郷したそうです。現在でこそお寺のお手伝いと音楽活動、さらに子育てを両立されていますが、帰郷した当時は「なぜ、私が？」の思いが強く、しかし同時に「それが幼いころから聞いてきた仏教の教え」と冷静に受け止められた一面もありました。

「死にたくない」。二階堂さんと同居しているおばあちゃん、時折弱弱しく言うそうです。けれど、「迷惑をかけるだけだから、早く死なないといけない」と言うときもあれば、「死にたくないけど、死にたくない」とも。それを聞いていて二階堂さんは思いました。

「そういう葛藤って、人間誰しもあると思うし、自分も家族も明日生きていくかわからない。だからこそ、いま自分がどう生きるかがテーマになってくる」。目下被ばく70年をテーマに作曲中だそうで、家族との生活、友人知人や地域との交流のなかで言葉を探し、言葉をつむぎ、言葉を伝える旅は続いています。これからも応援したい歌手のひとつです。

二階堂さんが作り、歌う歌には仏教的なところが歌われています。「この世のすべては どうにもならない、それでも生きる わたしは生きる」「(「めざめの歌」)、「なぜさよならも言わぬまま 悔やんでもこのバカは 同じ過ち繰り返す」(「女はつらいよ」)、「気づいたような気になつて 案外それも外的な」(「いつのまにやら現在でした」)などの歌詞は、ストリートに仏教を歌っている

(住職)

1月18日「新年のつどい&コーラス練習」を開催しました。築百年の古民家を改修した本堂は、順調に工事が進み、まもなく竣工の予定です。ゆかりのある方々に工事の中の本堂の内部をご覧いただこうと、「新年のつどい」としてお餅つきをしました。写真の杵と臼は古民家で実際に使われていたものです。この日、ついたもち米は20kg。つきたてのお餅を押し餅にして皆さんにお持ち帰りいただく一方、アツアツのお餅をきなこや大根おろしなどをまぶして、さっそくいただきました。ご葬儀やご法事でお寄せいただいた皆様のお布施が、積みもり積もって今回の改修

につながっています。竣工した後には、おひとりでも多くの方に足を運んでご覧いただきたいと思っております。



参りください。

ご先祖を偲び、西方浄土へ想いはせる盂蘭盆会を、東京築地の築地本願寺でおつとめいたします。

■7月12日(日) 午前11時
■築地本願寺(東京メトロ築地駅下車徒歩1分、無料駐車場あり)

富山浄泉寺

住職、埼玉

浄泉寺住職

ともに参り

盂蘭盆会のご案内

参加費3,000円(お一人様)

ます。法要後には築地本願寺「日本料理紫水」オリジナルの精進弁当をいただきます。とくに初盆(新盆)に当たられる方は是非お

法要懇志とお弁当代として) 電話 福井学誠(埼玉浄泉寺住職) 後日往復葉書を郵送いたしますので、返信でお申し込みください。

【今後の活動】

- 4月5日(日)10時 わくわく子ども会(浄泉寺)
- 4月17日(金)19時(毎月開催) 親鸞聖人御消息講座(第17回) フレサよしみ
- 4月18日(土)9時(偶数月開催) 写経会(浄泉寺)
- 5月15日(金)19時 親鸞聖人御消息講座(第18回)(フレサ)
- 5月17日(日)10時半(奇数月開催) 浄泉寺コーラス練習会(浄泉寺)
- 6月19日(金)19時 親鸞聖人御消息講座(第19回)(フレサ)
- 6月20日(土)9時 写経会(浄泉寺)
- 7月12日(日)11時 盂蘭盆会(お盆の法要) 築地本願寺(東京・中央区)
- 「お墓はいつまでに建てれば良いのか」という質問をあちこちで受けます。墓石の建立は早

いに越したことはありませんが、一周忌をめどにするのが一般的なようです。一方で忌明けまでが良いとか、三回忌、七回忌前の盆や彼岸までに建てれば良いとする説もあります。一周忌を墓石建立のめどにするようになったのには、一周忌は法要で人々が多く集まり、個人の思い出がまだ心に新しく、感慨ひとしおだから良いタイミングになり、さらに、そう長く家の中に遺骨を置いていくのはご先祖様に申し訳ないという心情が背景に考えられます。だからといって死んですぐお墓を作るのも難しく、一年というきりの良い時間が、いつしか一般化したのでしょう。■結局のところ、お骨はお墓に納めなくても、どこにあっても構わないというのが、わたしの考えです。さらに極端な言い方をすれば、遺骨の置き場所に執着するほうが、むしろ不自然でおかしいとさえ思います。親鸞聖人は「某、閉眼せば、賀茂河にいれて魚にあたふべし」と言い残されました。遺骨は朽ち果てた肉体の断片で、いのちそのものとは別だと、きつとほとけさまもおっしゃるでしょう。(住職)